

日本語会話における述部の構造

—「相互行為と文法」の観点から—

中村 香苗

淡江大学／東呉大学 日本語文学科

128094@mail.tku.edu.tw

一、はじめに

本研究は、近年注目されている「相互行為と文法」(Ochs, Schegloff & Thompson, 1996)の観点から、日本語会話における発話末の述部の構造について考察する。この研究領域では、「文法」とは話し手の頭の中に存在する知識ではなく、相互行為の中に存在するものだと考えられている。文法と相互行為の成り立ちは切っても切れない関係であり、言語とは何かを考える時、それが相互行為の中でどのように使われるのかを検証することが不可欠だと考える。

また、相互行為において、言語は会話参加者達が協同で行為を達成するために利用される資源の一つにすぎないと捉えられている。過去の相互行為研究では、会話参加者がマルチモーダルな資源(文法、韻律、視線、頭の動き、体の向き、周辺にある物など)を巧みに組み合わせて、今、何が起こっているのかを、目に見える形で示していることを明らかにしている (Goodwin, 1981, 1996, 2003; Hayashi, 2003, 岩崎, 2008)。

本研究は、非言語行為も考慮に入れた会話分析の手法を使って、日本語母語話者の会話を検証する。そして、話し手がある事柄に対する見解を表明する発話の産出中に、聞き手の反応を探り、その反応を自身の発話末尾(述部)の構造に反映させていることを例証する。その際、聞き手からの視線の欠如が、その後の話し手の発話の構造に影響することを明らかにする。本研究の結果をもとに、日本語の文末モダリティ表現の研究に、相互行為的観点を導入することの重要性を提起したい。

二、会話分析とは

会話分析とは社会学のエスノメソドロジーに強い影響を受け、1960年代後半から70年代にかけて、アメリカの社会学者Harvey Sacks、Emanuel Schegloff、Gail Jeffersonによって確立された研究手法である。会話分析では、一つの発話がどのように組み立てられ、その発話に関連して次の発話、さらにその次の発話がどう展開して行くのか、ということを経視的に観察する。それにより、参加者自身による相互行為を組織化するための手法や規則性を明らかにする。

二、（一）会話における聞き手の参与

Goodwin (1981)は、参加者の非言語行為に注目して一つの発話の産出過程を詳細に分析し、発話とは話し手と聞き手（達）が共に積極的な会話の成員として従事することで構築される「協同の産物」であることを明らかにした。例えば、聞き手はあいづちや、うなずき、視線、表情、協同発話など、様々な形で話し手の進行中の発話に対する反応を明示（または示唆）する。話し手もまた、自身の発話構築過程で聞き手の行動を注意深く観察し、聞き手の反応に敏感な形で発話を随時構成し（直して）ている。

見解表明の発話では、話し手は聞き手が見解内容に賛同するように発話を組み立てることが望まれる。4章の分析では、視線による聞き手の参与の仕方に合わせて、話し手が発話末尾で自身の見解をどう調整しているのかを明らかにする。

二、（二）会話における視線の機能

Kendon (1967)は、2人組の英語話者の会話を分析し、話し手は長い発話の開始時に聞き手から視線を外し、発話の終了間際に聞き手に視線を向けるというパターンを発見した。さらに、視線を向けられた聞き手は、間を空けずに返答を返す傾向があることもわかった。坊農・片桐 (2005)によると、日本語会話でも似たような視線のパターンが観察できる。

一方、Goodwin (1981)は、話し手が発話途中で聞き手に視線を向けた時に、聞き手が話し手を見ていない場合、話し手はしばしば音声的乱れを起こして、聞き手の視線を確保することを発見した。つまり、参加者の視線は現行の会話に従事していることを示す重要な資源なのである。

また、Haddington (2006)によると、聞き手の視線は話し手の発話に対する聞き手の態度を示唆する。具体的には、話し手の評価に聞き手が賛同する場合、話し手と聞き手は視線を合わせるのに対し、賛同しない場合、聞き手は話し手から視線

を外してから、不賛同を発する。つまり、見解交渉において、聞き手の視線の有無が、話し手が聞き手の反応を判断する有力な資源となり得るのである。

上記の先行研究をもとに、本研究では日本語の見解交渉においても、話し手が聞き手の視線の欠如を相互行為上の「トラブル」と認識していることを例証する。

二、（三）相互行為を組織する場としての発話末尾

発話末尾は相互行為を組織する場として重要な役割を果たす (Schegloff, 1996)。それは、発話末が、会話の根幹をなす話者交替に関する諸問題に対処する場所だからである。さらに、日本語では通常、発話末に述語が現れるという統語的な特徴もある。Thompson & Couper-Kuhlen (2005)によると、述語は発話の「投射」（その先の展開を予示すること）の鍵となる言語要素である。つまり、日本語の発話末は、話者交替と投射という2点から、相互行為において大切な位置であり、しばしば述語の周辺で参加者間の相互行為的交渉が行われる（中村、印刷中）。

また、日本語の発話末には、概して終助詞や「だろう」「かもしれない」「と思う」など、話し手の心的態度を表す表現が伴うことが多い。見解表明の発話において、モダリティ表現は、主張内容は変えずに主張の強さを調節する役割を担っている。4章の分析では、日本語の見解表明の発話で、発話末の述部が参加者間の交渉場所として利用されていること、その際、聞き手の視線の欠如が、その後の発話の構成（モダリティ表現の選択など）に密接に関わることを示す。

三、データ

顔見知りの2人、または3人の日本語母語話者が、中級日本語教科書に載っている「女の三重苦¹」という読解教材を読んで感想を話し合っている場面を約30-45分間録画した。

四、分析

例1は、2人の女性（カズとトモ）が、現代女性のライフスタイルに関する男性の見方を推測している場面である。分析対象となる発話は、トモの26-27行目であるが、まずはそれに先行する会話の展開を説明する（例1a参照²）。

¹ 『中級の日本語 An Integrated Approach to Intermediate Japanese』 Akira Miura & Naomi Hanaoka McGloin (The Japan Times)のpp.292-293に掲載されている読解教材で、「私は女性にしか期待しない」松田道雄（岩波書店）より抜粋されたもの。

(例 1 a)

- 1 カズ： °ほんと 男の人は (.) どうなんでしょうかね. °=
2 トモ： =どうなんだろうね：. わかん- ね、わかんないけどどうなんだろう.
3 (.)
4 カズ： >いや-< 例えば あたしの弟とか2 1で なんかに
5 トモ： [うん=
6 カズ： [就職したばかり(.)あ- 就職活動して内定とってるところだけど：
7 トモ： あ：：
8 カズ： 結婚はやっぱり (.) 家庭に入ってくれる人がいい と(h)か言って(h)
9 トモ： そうなんだ.
10 カズ： 絶対 俺を支えてくれ- 支えてくれる人じゃなきゃって(h)
11 [言ってる(h)けどね(h)
12 トモ： [へ：：：：
13 カズ： ま(h)だ(h)は(h)た(h)ら(h)いて(h)もな(h)い
14 [の(h)に(h) [はあ：：?って感じ.
15 トモ： [ん ふ ふ [ふhahahah .H:： そっか：.

((10行省略))

1行目でカズは、男性は女性のライフスタイルについてどう思っているのか、という疑問を提示し、2行目でトモがその疑問に同感を表明する。そして、カズが自分の弟の例を語り始める(4行目)。カズが結婚相手に対する弟の理想を述べると、トモは情報をニュースとして受け取ったことを示す(9行目、12行目)。一方、カズはまだ働いてもない弟の理想に対して、強い批判の態度を表明して、語りを締めくくる(14行目)。

その後続く10行(省略部分)で、カズは、弟の考えはアメリカに行ってしまうような姉の影響だろうという推測を冗談半分で述べ、トモとカズは笑い合う。この後、会話の進行が滞り、短い沈黙の後、トモがカズとは異なる見解を表明する(例1b)。(話し手の視線を発話の上に、聞き手の視線を下に表記する。)

² トランスクリプトの特殊記号は、付録の記号凡例を参照されたい。

(例 1 b)

- トモ：視線は下を向いている
トモ：カズの方に顔を向ける／
↓ 視線はカズの胸の辺り
- 26 → トモ： でも そういう：：：(.) 理想はあるん- (0.3)
カズ：視線は下を向いている
- ↓ トモ：視線カズの顔へ
- 27 → じゃない やっp- = あるの- (.) かな：. =
- ↓ カズ：視線トモへ
- 28 カズ： = どうなんでしょうね。そ、たと(h)えば(h) ど(h)う(h)な(h)ん
29 で(h)す(h)か(h)？

26行目の冒頭で、トモは「でも」という接続詞で反論を予告し、続いて先行の発話内容を指す指示詞「そういう」を顕著に長く延ばして、何か後の発話が言いにくいことであることを示唆する。この発話の冒頭、トモもカズも机の上の記事に目を落としている。しかし、話し手トモは述語「(理想は)ある」を発すると、続く名詞化助詞「ん」で音を詰まらせて発話を中断し、同時に顔を上げてカズの胸の辺りへ視線を向ける。ここまで聞けば、トモが先行のカズの態度に反して、弟を擁護していることがおおよそ理解できる。

そして、相手の反応を促す表現「じゃない」を発すると、さらに主張を強める副詞「やっぱり」を付け加え始める。この時、視線をさらにカズの顔へ向けるが、カズが下を向いていることを確認したトモは、副詞の産出を途中で止め、すぐさま述部のやり直しをする。結局、トモは修正前よりも主張の強さを弱めた「(ある)のかな」というモダリティ表現で、発話を完結する。つまり、話し手トモは、聞き手カズの視線の欠如を自身の見解に対する不賛同の示唆と解釈し、主張態度を弱めたのである。実際、カズは次の発話順番でトモの体験談を促し、トモの見解に対する反応を明示することを避けている³。

次の例は、3人の女性(モモ、マキ、アミ)の会話である。この抜粋は、「女の三重苦」の「苦」という表現に異議を唱えたモモが、マキに求められてさらなる説明をしている場面である。

³ 聞き手が話し手に賛同しない場合、次の発話順番で質問をしたり、内容を確認したりして、不賛同の発話の産出を遅らせる手段が取られることがある (Pomerantz, 1984)。カズの発話も、あえて反応を表明しないことで、不賛同を示唆していると解釈できる。

(例2)

モモ：顔はマキの方を向いている

1 モモ： うん. =でも どれもできないからら[: 確かに どれかを=

2 マキ： [うん

マキ：視線モモへ

アミ：視線下方へ

(モモ：顔マキへ)

3 モモ： =はずそうと思ってる- から[:

4 マキ： [うん

↑マキ：視線下方へ

(モモ：顔マキへ)

5 モモ： いろんな選択を するんだけど[:

6 マキ： [うん

↑アミ： ↑アミ：視線下方へ

頭を上げて視線モモへ

↓モモ：顔をアミへ向ける

↓モモ：視線マキへ

7 ➔モモ： でも なんか (.) 重荷とかあんま 思わ- (0.3)

↑アミ：視線モモへ

↑アミ：視線下方へ

(モモ：視線マキへ)

8 ➔モモ： ない[:(ね)=ない- (.) んじゃないかな： と思う. °てか°=

9 アミ： [うん. 最初から苦とは思ってないよ.

アミ： (視線下方)

マキ： (視線下方)

10 マキ： =その人達？ その立場の人？

11 モモ： うん.

モモは説明を要求したマキに顔を向けて1行目からの発話を開始し、マキもモモに視線を向けて発話を聞いている。一方、もう一人の聞き手アミは、モモの発話冒頭からずっと膝の上の記事に目を落としている。話し手モモは、まず三重苦（仕事、家事、育児）を抱えた女性の状況（「どれもできないから、どれかをはずそうと思って、いろんな選択をする」）をまとめるが、その途中で聞き手マキはモモから視線を外す（3行目）。一方、まとめの全容が明らかになりつつあるころ、下を向いていたアミが頭を上げて、モモに視線を向ける（5行目）。おそらく周辺の視野にアミの頭の動きが入ったモモは、発話が「でも」という接続詞で新たな展開に入ると同時に、アミの方へ顔を向ける（7行目）。その直前に、

アミは視線を下に落としていたが（5行目末尾）、モモが「なんか」というフィルター産出すると、再度頭を上げてモモへ視線を向ける（7行目）。こうして、見解の核心を表明する直前に、話し手モモは聞き手アミの視線を確保する。

ところが、モモの主張内容がほぼ明らかになる（「重荷とかあんま思わ（ない）」）と、聞き手アミは再度モモから視線を外す。それを確認するのとほぼ同時に、聞き手の視線の欠如に対処する方法として（Goodwin, 1981）、モモは産出中の述語を途中で止めて、発話を0.3秒中断する。

しかし、アミからの視線が確保できないモモは、結局、もう一人の聞き手マキへ視線を移し、発話を再開する。モモは「ないね⁴」という断定的な表現で発話を一度完結する（8行目）が、マキの視線も自分に向いていないことを観察すると、即座に述部をやり直す。結局、「（ない）んじゃない」「かな」「と思う」というように、モダリティ表現を3つも重ねて、かなり主張を弱めた形で発話を完結している⁵⁶。

本章では、話し手が見解を表明する発話の産出途中で聞き手に視線を向けた時、聞き手からの視線が確保できない例を2例検討した。例1では、述語に続くモダリティ表現産出中に聞き手の視線の欠如を確認した話し手が、即座に述部をやり直して、主張を弱めたモダリティ表現で発話を完結していた。3人組の会話の例2では、聞き手の視線外しが起こると、話し手はまず別の聞き手に発話を向けることで対処していた。しかし、その聞き手も見解の核心直後に視線を外したため、話し手は再度聞き手を変えるという対処法を取った。結局、最後まで聞き手の視線を確保できなかった話し手は、例1と同様、述部をやり直し、主張をかなり弱めて発話を完結していた。

五. 結論

本研究の結果から、会話における見解交渉に、参加者の視線が重要な役割を担っていることが明らかになった。Haddington (2006)は、英語会話の分析で、賛同／不賛同の反応は視線の向きによっても具現化されることを明らかにしたが、日本

⁴ 実は「ない」の後の部分はアミの声と重なって音声が不鮮明であり、「ないよね」とも「ない：ね」とも聞こえる。

⁵ この発話の直後に、「てか（ていうか）」という表現で、発話の言い換えをしようとしているのも、聞き手マキの視線の欠如を不賛同の示唆と受け取り、それに対処しようとした証拠であろう。

⁶ 実際には、9行目でアミからの賛同が起こっている。しかし、本稿の論点は、その直前のアミの視線外しを話し手モモがどう解釈し、それを発話に反映させたのか、である。アミが実際どう思っていたのかは、問題ではない。

語会話でも、聞き手の視線の欠如が不賛同のシグナルとして話し手に解釈されることが例証された。

さらに、日本語の発話末に用いられるモダリティ表現の選択が、相互行為的交渉の所産であることもわかった。日本語のモダリティはすでにその統語構造や意味的／機能的分類、表現使用者の認知システムなどについて多数研究されているが、筆者の知る限り、相互行為の組織化という観点からモダリティを論じた研究はほとんどない⁷。今後モダリティを始めとする言語使用の研究に、相互行為的観点を導入することで、様々な現象のこれまで見逃されて来た側面が照らし出されていくことが期待される。

参考文献

- 坊農真弓・片桐恭弘 (2005) 「対面コミュニケーションにおける相互行為的視点—ジェスチャー、視線、発話の協調—」 『社会言語科学』 7(2), pp3-13.
- Goodwin, Charles. (1981). *Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers*. New York: Academic Press.
- Goodwin, Charles. (1996). “Transparent vision.” In Ochs, Elinor, Schegloff, Emanuel A., & Thompson, Sandra A (Eds.), *Interaction and Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 370-404.
- Goodwin, Charles. (2003). “The body in action.” In Coupland, Justine., & Gwyn, Richard (Eds.), *Discourse, the Body and Identity*. Houndsmill, NY: Palgrave/Macmillan. pp. 19-42.
- Haddington, Pentti. (2006). “The organization of gaze and assessments as resources for stance taking.” *Text & Talk*, 26 (3), pp. 281-328.
- Hayashi, Makoto. (2003). *Joint Utterance Construction in Japanese Conversation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Kendon, Adam. (1967). “Some functions of gaze direction in social interaction.” *Acta Psychologica*, 32, pp. 22-63.
- 岩崎志真子 (2008) 「会話における発話単位の協調的構築—「引き込み」現象からみる発話単位の多面性と聞き手性再考—」 串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『「単位」としての文と発話』 東京 ひつじ書房 pp. 169-220.
- 森田笑 (2008) 「相互行為における協調の問題—相互行為助詞「ね」が明示するもの—」 『社会言語科学』 10(2), pp.42-54.

⁷ 例外に森田 (2008)がある。森田は終助詞「ね」の使用について、会話分析を用いて終助詞研究に新たな論を提供している。

中村香苗（印刷中）「会話における見解交渉と主張態度の調整」『社会言語科学』

Ochs, Elinor., Schegloff, Emanuel. A., & Thompson, Sandra.A. (Eds.). (1996). *Interaction and Grammar*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Pomerantz, Anita. (1984). "Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes." In Atkinson, Maxwell. J., & Heritage, John (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis*. Cambridge, UK: Cambridge University Press. pp. 57-101.

Sacks, Harvey., Schegloff, Emanuel. A., and Jefferson, Gail. 1974. "A simplex systematics for the organization of turn-taking for conversation." *Language* 50 (4), pp. 696-735.

Schegloff, Emanuel. A. (1996). "Turn organization: One intersection of grammar and interaction." In Ochs, Elinor, Schegloff, Emanuel, A., & Thompson, Sandra, A. (Eds.), *Interaction and Grammar*. Cambridge, UK: Cambridge University Press. pp. 52-133.

Thompson, Sandra. A., & Couper-Kuhlen, Elizabeth. (2005). "Clause as a locus of grammar and interaction." *Discourse Studies*, 7, pp. 481-505.

付録

トランスクリプトの記号凡例

[オーバーラップ発話の始まる場所。

(.) 0.2秒以下の短い沈黙。

(0.0) 沈黙の長さ、単位は秒。

= 前後の発話に切れ目がないことを示す。

- 音声の中断。

: 音の延ばし、コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応。

>< 前後に比べて発話のスピードが速くなっている場所。

, / . / ? 発話継続／下降調／上昇調のイントネーション（統語的な切れ目とは必ずしも一致しない。）

h / ·h / (h) 呼気音／吸気音／笑い。

文字 発話の強調（音量が大きくなったり、音が高くなるなど）。

°文字° 発話が音声的に弱められている場所。

(文字) 聞き取りが曖昧な場所。